

「東京新聞」の「平和の俳句」、5月掲載の句より。

「和菓子屋もパン屋も平和のためにある 阪口恵（めぐみ）（32歳）」<いとうせいこう 道徳の教科書を差し替えるという「忬度（そんたく）」。第二次大戦に向かった日本社会の馬鹿（ばか）げた反復。和菓子屋もパン屋も平和の姿なのに。> 安倍政権は国家主義的な方向に向かっている。道徳の教科書の例話で、パン屋より和菓子屋の方がいいとして選ばれたという。米軍上陸の際には、突き刺そうと練習した竹槍の「銃剣術」を体育に復活させるという。文科省の安倍政権への忬度、回顧趣味には、呆れを越して、哀れみをもよおす。文科省の官僚たちはまず、法令違反の天下りをしないように「道徳教育」を受け義務があろう。現場の先生方は過重労働を強いられ、心身共に疲れ切っている。生徒たちとゆったり向き合う教育現場に戻すことが、一番大切なことではないか。

「法守り餓死を選んだ判事居る 池野武行（72歳）」<金子兜太 三十三歳の山口判事を作者とともに忘れることはない。敗戦直後の国中の飢餓状態のなかで食糧管理法に殉じた青年判事を記憶せよ。> ヤミに手を染めず、配給で餓死した裁判官は法に殉じて立派である。しかし、全ての人に求められることではないだろう。上野駅にたむろした戦災孤児たちはかっぱらいをして、かろうじて命を取り留めた。両親が死に、遺された二人兄弟の兄は結核で死の床にあり、弟に「泥棒しても、生きよ」と言い残して逝ったと聞いたことがある。貧富の格差は、このような状況を生み出しているのではないか。

「戦争で人は人としてあつかわれぬ 三原羽奈（はな）（12歳）」<いとうせいこう 戦争の定義としてこれほど正確なものがあるか。国家最優先の論理。><金子兜太 お国のために死んでこいと言われていた、と知って少女驚く。> 戦争は人を人扱いできない獣にする。獣にならなければ、人殺しの戦争はできない。中国戦線では奪い尽くし、焼き尽くし、殺し尽くす三光作戦を突っ走る獣であった。しかし、撫順の管理所で人間扱いされ、虐殺された人にも自分と同じように悲しむ家族がいることを知って、人間に回復していった。この罪責を認めるまでの間の苦悩は身もだえする苦しみであった。この苦しみを体験した中国帰還者連絡会の人々の、平和への篤い願いを継承していきたい。

「昨日までつないだ平和明日へと 浅井陸輝（12歳）」<いとうせいこう 一日ずつ紡いでいく人間の営為。切ってしまうことは簡単で残酷である。今日引き取って明日へと渡す。それが七十二年続いている。> 12歳の少年が過去から未来を展望している。平和憲法9条の下で、72年間、戦争をしないで平和を保ってきた。銃による戦死者を一人も出さなかったことは世界に誇り得ることではないか。平和はあるものではなく、努力して、皆で作っていくものである。作ってきた平和を、明日も作っていくものでありたい。

「異国の嫁平和な日本尊びし 松井定子（66歳）」<金子兜太 うれしいのだ。息子の妻はインドネシアの人。金沢に暮らして十六年になるが、食べ物がおいしく、住みやすく、平和、と喜ぶのだ。> 松井氏の息子さんの奥さんはインドネシア人で、金沢に嫁いで来て16年になり、食べ物がおいしく、住みやすく、穏やかな日々を喜んでいっているという。異文化の中で、戸惑うこと、苦しいこともあっただろうが、今、日本の平和を満喫しておられる。この平和を守りたいと切に思う。私の周りにも、中国人、韓国人、フィリピン人、インドネシア人、米国人と結婚した方々がいる。民族を超えて、共生するところに草の根の平和が実現していくのではないか。